次世代につなげていくために

ラボラトリー方式の体験学習は、レヴィンと研究仲間たちが米国コネティカット州で研修依頼を受けて行ったワークショップ開催の年1946年、もしくは翌年からスタートした特徴的な継続的グループ、ベーシックスキルズトレーニング（ＢＳＴ）の始まりを誕生とよぶことができるだろう。その誕生から60年の時を経たことになる。その後ＮＴＬにてトレーニングラボラトリーとして人間関係トレーニング、とりわけＴグループ（トレーニンググループの略）が実施され、1958年に我が国においてはじめてＴグループが実施された。今年は、我が国にとって、ラボラトリートレーニングがスタートして50周年という記念すべき年である。

そこで、私ども人間関係研究センター紀要では、「体験学習　50年の歩み」と題した特集を組むことにした。特集では、ラボラトリー方式の体験学習の歴史やラボラトリー方式の体験学習を実践する教育者のファシリテーションに関する投稿記事が掲載されている。またラボラトリー方式の体験学習の学びのキーワードとなるフィードバックに関する再考論文や、応用分野としての箱庭療法における体験と治癒・変容過程に関する論文も掲載することができた。

1958年に我が国においてラボラトリー方式の体験学習が実施されてから、1962年に立教大学キリスト教教育研究所（JICE）が開設され、そのJICEメンバーの支援を受けながら、1973年に南山短期大学に人間関係科が誕生、1977年に南山短期大学人間関係研究センター開設、そして2000年には南山大学人文学部心理人間学科および人間関係研究センター、2004年南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻開設と、ラボラトリー方式の体験学習というバトンをつなぎながら、今日南山大学が日本におけるラボラトリー方式の体験学習を用いた教育の重要な拠点になってきている。

ラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係づくりのトレーニングを学校教育現場に応用し、子どもの人間関係力、教師の資質向上、さらには学校の教育改革をめざした南山大学のプロジェクトが、平成17・18年度文部科学省教員養成GPおよび平成19・20年度文部科学省教育推進GPとして採択を受け取り組んできている。その成果は、子どもたちの学級内での人間関係の改善や教師の資質向上といった結果を得ることができた。また広く全国に南山大学からラボラトリー方式の体験学習を発信することができ、平成21年度の教員の免許更新研修にもラボラトリー方式の体験学習による人間関係づくりのプログラムが積極的に導入されることになっている。

こうした歩みをふりかえると、感慨深いものがある。とりわけ、日本にラボラトリー方式の体験学習が導入された時代に生き、情熱を傾けられた第一世代の方々は今、70代を超えた年齢になられている。その人たちの影響を受けた第二世代のメンバーは50〜60代に、そして40代を中心として第3世代へとラボラトリーの火を消すことなく燃え続けてきている。さてこれから、第四世代の20代の人たちがラボラトリー方式の体験学習と出会い、教育や研究に関心を向けて次の時代につながっていくことができる環境を創ることができるかがこれからの大きな課題であろう。レヴィンがめざしたラボラトリーによる社会変革の課題は山積みである。

私ども、人間関係研究センターでは、ラボラトリー方式の体験学習をベースにした研修の充実と大学院教育ファシリテーション専攻の院生・修了生との共同による社会変革をめざした研究実践が積み重ねられていくことが重要になるのではないだろうか。

本研究紀要とともに、センターが開催する研究会や研修会がこれからの世代の人たちのラボラトリー方式の体験学習の実践と研究につながっていくことを切に願っている。

南山大学人間関係研究センター長　**津　村　俊　充**

人間関係研究センターの窓から